

ボン大学付属植物園



旧宮殿（現在はボン大学植物研究機関の実験室として使用）を背景にボン大学付属植物園

広大なコッテン森（Kotten Forst）を背景にゆったりと流れるライン川、またローマ時代にまでさかのぼる歴史的な重みなど、ヨーロッパ独特の情緒が感じられるドイツのかつての首都、ボン。この地は音楽家ベートーヴェンの故郷でもあり、また大学を拠点とする学問の街としても知られています。このような風土ともよく合い、植物園としての伝統的な姿と役割を保ったボン大学の植物園は、世界に代表される植物宝庫の一つです。

宮廷の庭から植物園へ

街の中心から続くマロニエの並木道の突きあたりに、ロココ朝の黄色い建物がそびえています。優雅な曲線と豪華な彫刻が刻まれたこの建物は、十八世紀に建てられた宮殿で、この辺りは宮廷ゆかりの地として400年以上の歴史を持ちます。当時から、宮殿を囲むように造られていた庭では、木々や草花、また野菜や果物などが栽培され、クラシックな“エデンの園”のような様相であったと記録されています。

1818年、ボン大学の創立によって、この庭は理学部に属する植物研究機関（Institute of Botany）の野外施設として再造成されました。大学における教育と研究を当園の目的として掲げる当時の信念は、現在でも変わらずに受け継がれています。植物研究についてはあらゆる分野を手がけていますが、近年、ハスの葉表面の構造的性質を応用して防水性の高いペンキを開発し、国内外の科学者や一般市民から、さらに高い定評を得るようになりました。



水分をはじく性質のハスの葉表面

誇り高いコレクションと栽培技術

約6 ha の広さである園内は、大まかに野外と屋内の2つのエリアに分けられ、合わせて約9、500種の植物が栽培されています。

野外エリアの見どころの一つは、生態園（バイオトープ、またはプラント・コミュニティエリア）です。生態園には、ボン市街地の周囲100 km以内に見られるすべてのタイプの植物群落が造られており、そこに生育する植物種数は、おおよそ3、000種にも及ぶと言われています。中には自生地の復元や個体の保全が必要な種も含まれ、種や植生の保護地としても重要です。また生態園は、他の生物の生息地としての役割も担っており、これらの種を対象とした研究のフィールドとしても活用されています。



生態園

野外ではその他、約700種の本木類を集めた樹木園（アーボリータム）や、大学の教材として最も利用される分類園（オーダーベッド）、また創設当時に植えられた二本のブナの木や、雌株と雄株が接ぎ木されたイチョウの木などが見ものです。

屋内は、九つの温室が連なった大きな棟になっていて、入り口からヤシ室、マングローブ室、オニバス室、多肉植物室、温帯植物室へと、見学ルートが設けられています。まるで熱帯雨林の中にもいるような冒険心に掻き立てられるヤシ室。もやっとした空気と深い霧、ヤシやシダ植物を中心に熱帯性の珍しい植物が生い茂る間を潜り抜けるように進むと、鳥や昆虫の鳴き声も聞こえてきます。この室で特に興味深いのは、室内栽培で最も大きいと言われるセイシェル島原産の双子ヤシ（*Lodoicea maldivica*）です。



熱帯雨林のようなヤシ室



多肉植物室

オニバス室

マングローブ室では、当園が最も誇るコンニャク (*Amorphophallus*) 属のコレクションが見られます。最大種であるスマトラ産の巨大コンニャク (*A. titanum*) は、植物園のシンボルマークにもされており、また2000年7月には、当園の歴史に残る話題的として注目をあびました。通常、タネから開花までに約10～13年かかるこの植物は、自生地ではごく当たり前に生えているものの、人工的な栽培で花を咲かせるには、相当な労力と経験が必要だと言われています。8年前、当園にはフランクフルトのパームガーデンから、この植物の組織培養苗が寄贈されました。その中の一つが塊根の重さ36kgにまで成長し、花丈257cm(史上第三位)にもなる巨大な花を見事に咲かせたのです。驚異的なその花を一目見ようと、当温室には3日間のうちに約1万5千人の見学者と報道陣が駆けつけました。



2000年7月6日に開花したスマトラの
大コンニャク (*Amorphophallus titanum*)

温帯植物室の植物は、夏の間は野外に出せるように、ほとんどが鉢植えになっています。3号鉢からクレーン車で運搬しないとならないような巨大な樽まで、総数1,200個の鉢の出入れには、それぞれ3週間ずつかかってしまいます。日本を含めた温帯地方の植物を集めたこの室での見ものはヤマモガシ科の植物です。この仲間の植物は一般に栽培が困難と言われており、当園でも園内で配合された特別な用土を用いて育成され、水やりにも細心の注意が払われています。こうして念入りに栽培されたものの中には、かつて英国のチェルシーフラワーショウで表彰された植物もあります。

ローカルからグローバルレベルに至る園の裏での活動

ボン大学付属植物園の活動は、一般には見られない園の裏でも活発です。例えば、植物のコレクションに関しては、世界に誇るリプザリス (*Rhipsalis*) 属(多肉植物の一種)とアリストロキア (*Aristolochia*) 属を保持し、また植物保全活動面でも、地元から国家、さらに国際レベルの数々のプロジェクトに携わっています。中でも最も顕著な例の一つがイースター島固有のマメ科植物 (*Sophora toromiro*) の国際保全プロジェクトで、1994年の発足以来、英国王立キュー植物園と共に、活動のリーダー役を務めてきました。



温室棟の正面。大きな樽に植えられたヤマモガシ科のバンクシア (*Banksia serrata*)